

調査船で東シナ海の海洋環境を調べることの意義

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 水産総合研究センター
	公開日: 2024-06-24
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 秋山, 秀樹
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2008582

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



水は巡る

— 調査船で東シナ海の海洋環境を調べることの意義 —

東シナ海海洋環境部長 秋山 秀樹

東シナ海は対馬暖流系群の水産資源の主漁場であることは言うに及ばず、最近では大型クラゲの出現やガス田の開発等でも注目を浴びています。東シナ海の海洋環境（水塊分布や流れ構造等）を調査することは大切なことです。

これまで多くの研究者が東シナ海の水塊分布や流れ構造について調査研究を行っています。東シナ海には黒潮水および黒潮起源の暖水と中国大陸起源の沿岸水が分布しています。また、それらの水塊配置には図1に矢印で示したような流れが伴っています。しかしながら、図1は模式図に過ぎず、このような水塊分布や流れが常時安定して存在している訳ではありません。東シナ海を巡る海水の動きを知るためには、少なくとも四季別年4回の調査は必要です。水産生物の産卵期、仔稚魚期、さらには盛漁期等の成長段階（生物カレンダー）を考慮すると、図2に示した定点で、もっと頻繁に海洋調査を実施しなければいけません。

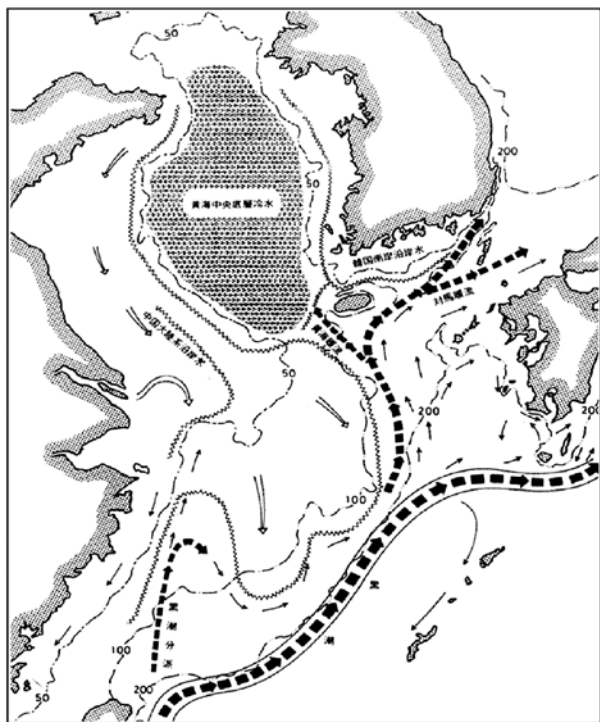


図1 黄海・東シナ海の海流と水塊配置の模式図（井上, 1981）

さらに、大型クラゲ等の有害生物の出現に関しては調査船調査でしかその実態を把握することはできず、東シナ海の巡回パトロールとしての調査船の役割は非常に重要です。

地球温暖化の影響で東シナ海の表面水温が上昇傾向にあることは前号（西海 No.3）で紹介しました。ところが、最近では燃油の高騰の方が著しく、西海ブロックをはじめ全国の都道府県で調査船による定線調査の実施が非常に困難になってきています。

50～100年後の我が国周辺水域の海水温をより正確に予測するためには、現状の影響評価を正確に行う必要があります。現在、それを調べることができるのは、全国の都道府県が一丸となって継続している定線調査以外にありません。

我が国周辺水域の定線調査を維持するためにはそれ相応の予算が必要ですが、きれいな海を未来へ引き継ぐため、今はそれ相応の投資を覚悟する時期です。決して「灯台下暗し」となってはいけません。

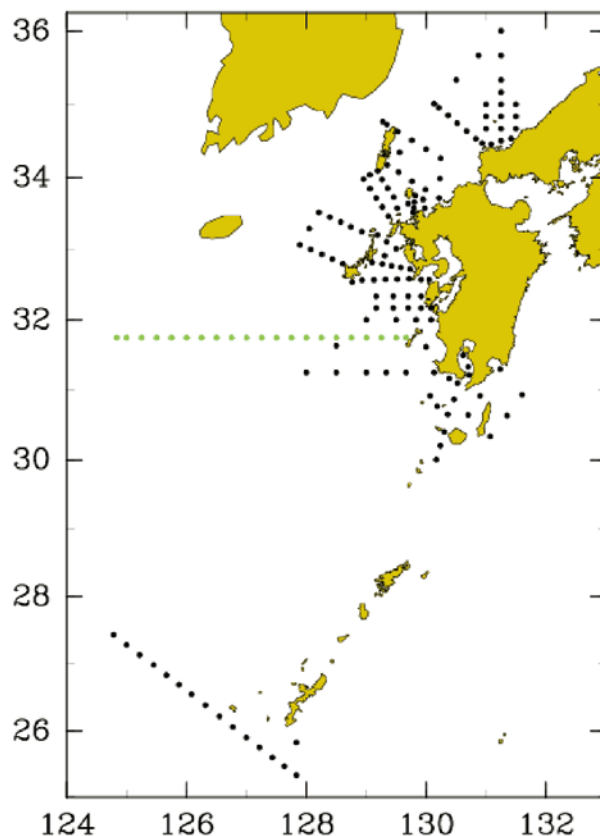


図2 東シナ海における観測定線（平成19年度）